

絵本のはなし

—未来の紳士淑女にすすめる一冊—

図書館に入った頃、先輩からいろいろな絵本を教えてもらったが、なかでもモーリス・センダックの『そんなときなんていう？』という本は衝撃的だった。私は小さい頃にあまり絵本を読んでもらった記憶はなく、初めて買ってもらった本は図鑑だった。そして一人で読むようになってからは、ほとんど物語ばかりだったので、絵本との出会いは図書館に入ってからが初めてと言っても過言ではない。それだけにいろいろな絵本を貪るように読んだ。定番の『ぐりとぐら』『三びきのやぎのがらがらどん』『おおきなかぶ』『ちいさいおうち』『ひとまねこざる』ここには書ききれない位たくさん読んだ。子どもの頃に出会っていたら…と思う絵本もあったが、大人になって出会えて良かった絵本もあった。『そんなときなんていう？』はまさにそれだった。“わかきしんし しゅくじよの ための れいぎさほうのほん”十数年前（20代で）初めて読んだ時、なんて上品でしゃれている絵本だろうと思った。



「じかようきで そらを とんでいると、
（中略）こまったことに やねに ちよつと おおきめの あなを あけっちゃった。
そんなとき なんていう？」

「ごめんなさい。」

絵は私も好きな絵本の一つ『かいじゅうたちのいるところ』で有名なモーリス・センダック。しゃれていると感じたのは、訳者が谷川俊太郎さんだからだと思う。もちろん絵本は絵で読ませるものだと思うが、特に外国の作品では訳者のもつ「ことばの力」によっても雰囲気が変わると思う。

ここ数年カウンターに立っていて感じることの一つに、挨拶を含めた会話が出来ない子どもが多いということ。もちろん大人もそうだが。私が小学生の頃は道徳の時間があり、挨拶を始めいろいろな（教科と違う）ことを教わった。今は、生活科やら、総合学習やら、ゆとり教育やら。挨拶は教育ではないと思うが、生きていくうえで大事なことは、小さいうちに教えてあげたいと思う。そんな時にこの本を思い出す。未来の紳士淑女にすすめる素敵の一冊。

—絵本は楽しい—

もう一冊、最近ブックトークで使った本から『わたし』（かがくのとも傑作集）。



この本は谷川俊太郎さんが文を書いて、長新太さんが絵を描いている。とても単純明快な本だと思っていたのだが、その反応は私の想像を超えるものだった。1、2年生は、「わたし」「おとこのこからみると」（おんなのこ）とこちらの問いかけの後に、必ず先に答えてくれて、そして満足な笑みを見せてくれた。3、4年生になると答えは知っているぞという顔をして、あまり声には出さず、答えたい子は私の方を向いて、口パクをして見せてくれた。一番驚きだったのは、高学年の5、6年生で、「こんな簡単な本」って一笑されるかと思っていたが、みんなで最後まで、大合唱状態。読んだ後、私も子ども達も満足感でいっぱいだった。なぜだろう？谷川マジックかな？などと考えてみたが結論ははず。でも私も子ども達もそれぞれが、それぞれの思いを秘めたことは確かだと思う。

だから「絵本」は楽しい。だからこの仕事はやめられない。これからもずっと児童図書館員としてたくさん子ども達と一緒に、いろいろな本と出会っていきたい。

【参 考】

『そんなときなんていう？』

S. ジョスリン（文）

M. センダック（絵）

たにかわしゅんたろう（訳）

岩波書店 1979年

『わたし』（かがくのとも傑作集）

谷川俊太郎（ぶん）

長新太（え）

福音館書店 1981年

（※絵本の表紙写真の掲載については出版社の許諾を得ています。）

松戸市立図書館

主査 加覧 牧子